

## 雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さって構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

### 個人による社会奉仕

社会奉仕の形は誠に多様であるため、本稿では限定して、個人が知らない人や社会のために自発的に心身等を提供し、金品等による対価を求めない形の一時的な行動を指すこととする。ただし、提供される側が拒絶しない場合に限ることは言うまでもない。金品等には「気遣い」を含む。即ち、本稿で言う奉仕は、相手側に一切の要求をしないという点で一貫している。

人を助け、社会のためになる行動には心を打たれることが多い。非常の場合など、知らない人に助けられて、その人は去ってしまいお礼の言葉も伝えられない、そういう形の奉仕を受けた人は、有り難さを生涯忘れないであろう。

本稿で言う奉仕は、個人の自由意思によるものに限る。同じ志向の仲間が集まって行動を共にするような場合も、社会奉仕に当たる。任意で作った団体には主導者ができ、小さくても組織をなすが、奉仕活動への参加は個人の自由意思によるものとする。個人の自由意思が利かない場合は本稿で言う奉仕には当たらない。

一般用語としての「奉仕」の意味はもっと広い。親戚が困った状況になったときに助けに行く場合、助けに行く側は対価を求めないであろうが、親族や特定の知人を助けるのは社会活動ではないから、本稿で言う社会奉仕には当たらない。

過去には「勤労奉仕」と言われる一般人の社会への労務提供があった。太平洋戦争の頃で、国策に沿って奉仕することは誇りであった。社会(=国)のためであり、対価を求めないという点では現在の社会奉仕活動と変わらないが、当時は現在と社会意識が異なり、自分で奉仕の仕方や場所を決めたり、辞めたりはできない時代であった。過去の勤労奉仕と現在の社会奉仕を単純に比較することはできない。

一般的にいう社会奉仕の形には、本稿で言う社会奉仕に当たる場合と、当たらない場合があるので、若干の例を挙げておく。

- ・近年は企業等による社会貢献事業についてよく聞く。多くは「金を出す」もので、金が非営利団体に回って、これに個人が参加して奉仕活動をするという形が見られる。この場合、個人の参加が自由意思によるものであれば、その個人については本稿で言う奉仕活動に当たる。企業や団体が個人の社会奉仕活動の媒体になっている形である。金は奉仕活動の実費に充てられるもので、奉仕する個人は受け取らない。

- ・任意団体としての劇団や楽団が社会奉仕をする場合、公演における団員個人は自由が利かないから、本稿でいう社会奉仕には当たらない。

- ・困ったときに頼めば無料で助けに来てくれる福祉団体があるが、その職員が団体から手当を受けている場合は、その職員の活動は本稿で言う社会奉仕には当たらない。

昭和 20 年代は戦争が終わって世の中の混乱が収まりつつある時代であった。こんな話がある。田舎の道は砂利道で、信号機も標識もない。自家用車はないが、バスとトラックは走っていた。各村には以前から、馬に引かせる大型荷車による運送業があり、馬力(ばりき)と呼んでいた。馬は一頭で、馬主が馬を引いて歩いた。馬力が通る道は、馬が随所で落し物をするから、道は汚れるが馬主は片付けなかった。

その頃一人の男が馬糞の收拾を始めた。人々は嘲笑した。彼は道路の清掃を行うと共に、收拾物を肥料とした。少なからぬ肥料は豊作をもたらした。彼の行動は、楽しみの少ない人々の笑いの材料になった。その息子は学校で「馬糞拾い」と言ってからかわれ、いじめられた。息子が馬糞拾いをしたのではないが、父親の奇行が息子への濡れ衣となった。自由意思による社会奉仕活動の習慣のない時代に、当の男は地域の笑い者にされた。しかし当人は意に介さず黙々と続けた。

奉仕者は、金品等による対価は求めないが、奉仕を受けた側がお礼の気持ちで金品等を差し出している場合、受けてよいか、辞退すべきか。例外的には受けてよいとしても、原則的には辞退すべきである。一方「金品等は求めてはいないが、先方が差し出すものなら貰ってもよいだろう」という理屈もあろうが、受けるのは好ましくない。なぜなら、奉仕者が金品等を受けると、奉仕を受けた側が金品等による「お返し」をするのが習慣化し、奉仕する側に金品等を期待する風潮が広がり、奉仕の本来の精神が損なわれる恐れがあるからである。奉仕する側は「お返し」を期待してはならない。奉仕を受けた側は、奉仕をしてくれた人に礼を表明すべきだが、金品等ではなく、口頭（言葉）によるのが必要かつ十分である。

初めに記した「知らない人に助けられて、その人は去ってしまい、お礼も伝えられない」という形の奉仕を受けた場合には、返礼の仕方がある。恩人には返礼できないが、代わりに別の人に奉仕するのである。急いであるのではなく、機会があるとき、自分が困った人を助けるよう心がけることである。その困った人が知らない人で、助けられたことに感動して、また別の人を助ける、こうして人助けの循環が生じ、奉仕の精神が社会的に広がる。奉仕者は奉仕の対価を求めないという精神が貫かれる。更に一般的に言えば、奉仕を受けた人は恩人への返礼は口頭で済ませ、機会を見つけて自分が奉仕者になることを心掛けるのが、最善の返礼になる。小さなことでよい。自分でできる範囲でよい。機会を見つけて奉仕をするという習慣が広がれば、奉仕は一層意義深いものになる。

近年、大規模災害が起きた際、大勢の人が被災地に支援に赴くようになった。この場合、各支援者が思い思いに行動すると、場所によって支援に過不足が生じ、現場が混乱し、効率を欠くことになる。そのため地元の自治体などが支援の仲介や調整や管理を行う形となる。支援者は自治体職員等の指示に従って行動することとなる。知らない人同士が大勢集まって無秩序に行動すると、不審者や火事場泥棒が混ざり込む恐れもあり、統制ある行動が必要になる。それで効果も高まる。支援者達は自分勝手に動かず、統率者の指示で動くことを喜びとしなければならない。なお、支援者は、支援に掛かる費用は自ら負担する。遠方からの支援者は、旅行や滞在費が高額になる場合があっても、全て支援者の負担とし、他に求めてはならない。

社会奉仕が成り立つためには、奉仕をする側とされる側が、同時に存在しなければならない。奉仕できる状態なのに、場面に遭遇しない、あるいは、奉仕して欲しいのに、そのことを伝えられない、こういう奉仕の需給の不一致は案外あるかも知れない。大きな災害や行事の場合、報道や主催者による広報で奉仕の需要が世間に伝わる。奉仕の意思がある人は、奉仕の可否を判断する。こうして奉仕の需給が合致すれば、うまく収まる。

2020年には東京を中心に世界の人々が集まり、運動競技が行われるが、主催関係者は多くの奉仕者が必要であるとして、若者を中心に奉仕者を募っている。役割の種類や奉仕時間などの条件を公示して公募しているが、成功が望まれる。一般に応募する側が何らかの見返りや処遇を求め、あるいは、主催者側が何らかの見返りや処遇を提示するような場合は、本稿で言う奉仕ではなく、雇用契約の感じになる。

私は社会奉仕の模範者でも指導者でもないが、少数の仲間と共に地域の美化のために小さな社会奉仕をしている。なお、先に挙げた馬糞拾いの主は、私の父であった。